

「神のことを思わず、人間のことを思っている」

(マタイによる福音書 16:21-27)

主イエスが受難と復活について、弟子たちに打ち明けました。しかしそれを聞いたペトロは、思い巡らす間もなく主イエスを脇へと連れ出し、いさめはじめます。「いさめる」と訳された単語は、「非難する」という意味を持つものです。主イエスの受難と復活は神の思い、神のご計画によるものです。ペトロは神のご計画を非難し、主イエスが進もうとする道に立ちはだかったのです。

ユダヤ人たちが期待していたメシア＝救い主は、十字架上で虚しく死んでしまうような者ではありませんでした。先主日の福音で、「あなたはメシア、生ける神の子です」と信仰告白をしたペトロですが、彼もまたユダヤ人の常識や期待、神や救い主のイメージといった、「人間の思い」に捕われたままでした。先週の福音では天の父の思いを受け入れ、信仰告白をし、祝福されたペトロですが、人間の思いに捕らわれてしまった今日の福音では、「サタン、引き下がれ」と叱られてしまいます。人間的な思いに捕われ、人間的な栄光を求めるなら主イエスを見誤るのであり、すでにサタンの誘惑の虜になっています。主イエスが言われた「邪魔をする者」とは、「罨」を意味する単語です。そのことから「行く手を阻む者＝邪魔をする者」という意味が発生します。ペトロは主イエスが歩まれる十字架への道を阻む者となってしまっているのです。23 節で「イエスは振り向いてペトロに言われた」とあるように、主イエスと共に歩むべき弟子は、主イエスの前ではなく、後ろを歩むべき存在です。しかし、主イエスの十字架への歩みの前に立ちはだかる限り、ペトロは「神のことを思わず、人間のことを思っている」サタンなのです。

神の思いではなく、人間の思いへと誘い込むサタンの「罨」は非常に巧妙かつ身近にあります。主イエスは、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」と言われました。それは、自分の思い、人間的な思いに留まるのではなく、必ずすべての命にとって良いものを与えてくださる神の思いに自らを明け渡す、ということです。主イエスは大切なときにはいつも、ことにご受難の前にはそれこそ血が滴るほどに神に祈り、「わたしの思いではなく、み心のままに」と願うことで、神のみ心に従って歩み続けました。主イエスですら祈ったのですから、わたしたちはさらに祈らなければなりません。祈りとともに十字架に向かって歩まれた主イエスのように、わたしたちも祈りつつ神のみ心に従って歩もうとすることこそ、十字架を背負うということです。自らの思いではなく、必ず良いものを備えてくださる神の思いに従って生きるところに、復活への道、死をも超えた「いのち」への道が開かれます。日々、祈りの中で自分の思いを見つめ、それが神の思いと重なるのか、人間的な思いなのか問い続けながら歩んでまいりましょう。